

郊外型古本屋の対極にあるもの 聖和大学の書票展を見て

岡 國 太 郎

先日写真家の森本二太郎さん（自然をモチーフにした写真家：次年度に氏の写真展が吉岡記念館で開催される予定）が聖和大学の大学祭での講演会講師として来られた。長野在住の氏とは旧知の仲であり、当日は氏と学院で落ち合い聖和大学まで同道した。今般、学院と聖和大学との合併が論議されており、私自身学院に奉職して22年が経過するものの、はじめての聖和大学への訪問となった。

校門には聖和大学の担当者が森本氏を出迎えのために待っておられた。私はそこで森本氏と別れて大学祭の見物でもしようとしたら、是非にとも勧められ応接室に招き入れられた。応接室では茂純子聖和大学理事長同席で昼食をとりながら歓談の時を持った。その席上、茂理事長から図書館で「書票展」が開催されていることをお聞きし、帰途「書票展」会場に出向いた。

会場は混雑するほどではなく、ゆっくりと見て回ることができた。「書票」とは「蔵書票」とも呼ばれ所有者の名前を刻した小さな紙片である。世界的には「エクスリブリス（EX-LIBRIS）」と呼ばれ、その歴史も長く、各所有者が版画家に依頼して各自の好みを取り入れて作らせたオリジナルデザインの書票は隠れた人気を呼び、コレクターも数多くいるそう。会場に展示された内外の書票は実に個性豊かなデザインで所有者の趣味趣向をうかがい知ることができ、アートとしての「書票」を存分に楽しむことができた。

日本の「書票」には「愛書」と記されているものも多くあり、それらを見ていくうちに一つの感慨が頭の中を巡ってきたのだった。それは「書票」の所有者が持つそれぞれの本に対する深い愛着を強く感じるとともに、「書票」の世界は、現在の日本でもてはやされている郊外型古本屋に見られる「本は消耗品」という感覚と対極的な位置にあるということだ。すなわち、昨今の「使い捨て消費文化」の中で失われつつある「ものを大切にする」というところを小さな紙片が教えてくれたような気がした。

（「書票展 蔵書票の魅力」は11月7日まで。問い合わせは聖和大学図書館へ）

（千刈キャンプ事務長）